

## 第Ⅳ章 報告方法の整理

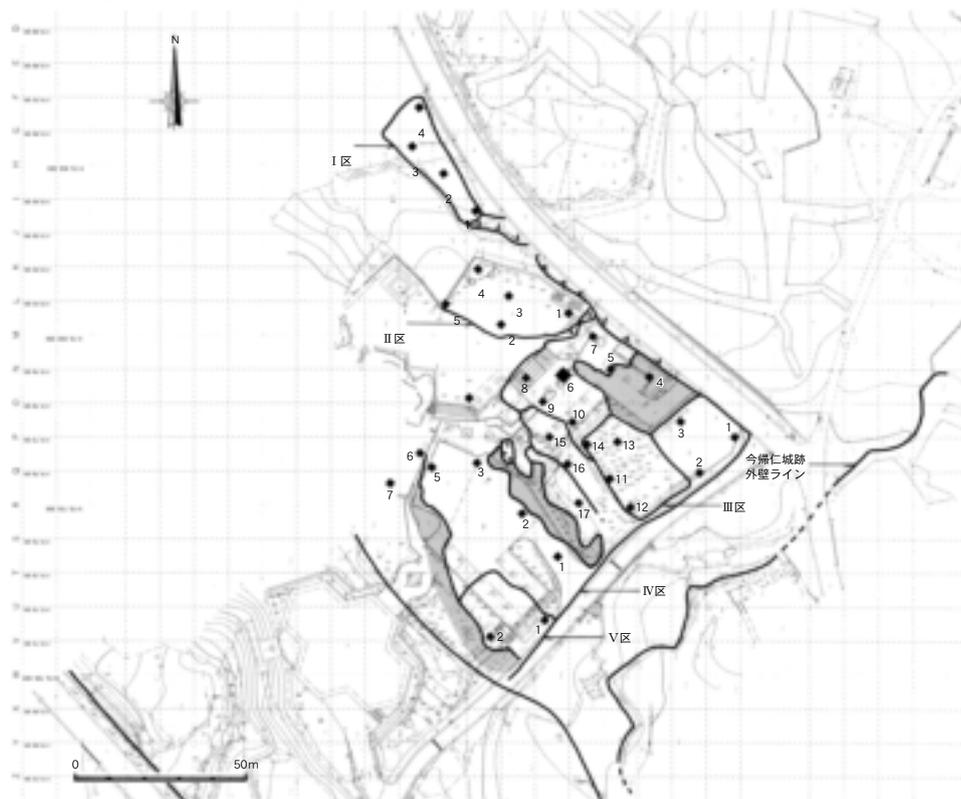
### 第1節 踏査と試掘調査

先に紹介したとおり、今帰仁城跡周辺遺跡の本格的な調査となったのは1984年より2カ年にわたって実施された調査を端とする（今帰仁村教育委員会1986）。これに加え、整備計画策定に係る調査が実施され、遺物の散布や石積み遺構分布が今帰仁城跡の周辺地域各所に見られることが解っており（今帰仁村教育委員会1992）、更に『今帰仁城跡周辺整備事業計画』（今帰仁村教育委員会2002）の策定に伴って実施された測量調査や、その後北部振興策事業に伴って実施されたハラクブの試掘調査（今帰仁村教育委員会2005）などによって、特に今帰仁ムラ跡の西側の遺跡範囲については、かなり具体的な遺跡範囲を理解することができている。

ここで紹介するのは今帰仁城跡周辺遺跡西区において実施された、試掘調査の成果について紹介する。第1次調査第1期では地形の現況から西区をⅠ区～Ⅴ区の地区に分けた。それぞれ約2m×2mの試掘坑を設けて包含層の堆積状況や遺構の詳細を確認することを目的とした（第6図）。この調査によって西区全体に遺跡が良好な状態で包蔵されていることが確認されている（今帰仁村教育委員会1986）。出土した主な遺物を第7図に示した。

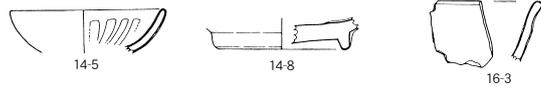
#### 《参考文献》

- 今帰仁村教育委員会（編） 1986年 『今帰仁城跡周辺遺跡』 今帰仁村文化財調査報告書第12集
- 今帰仁村教育委員会（編） 1992年 『今帰仁城跡公園基本構想・基本計画書』
- 今帰仁村教育委員会（編） 2002年 『今帰仁城跡周辺整備計画書』
- 今帰仁村教育委員会（編） 2005年 『今帰仁城跡周辺遺跡 Ⅱ』 今帰仁村文化財調査報告書第20集

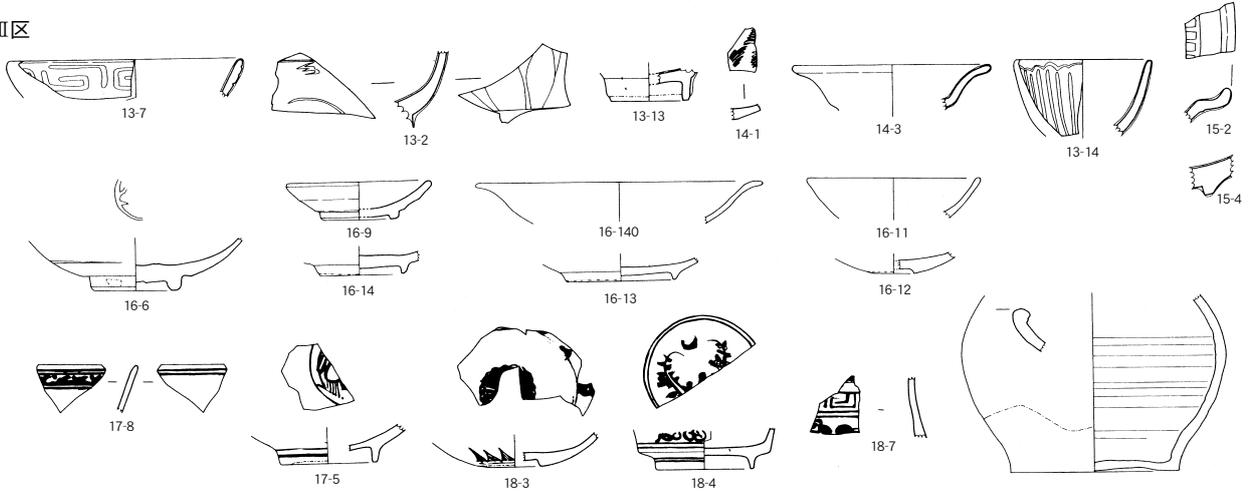


第6図 試掘調査箇所位置図

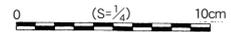
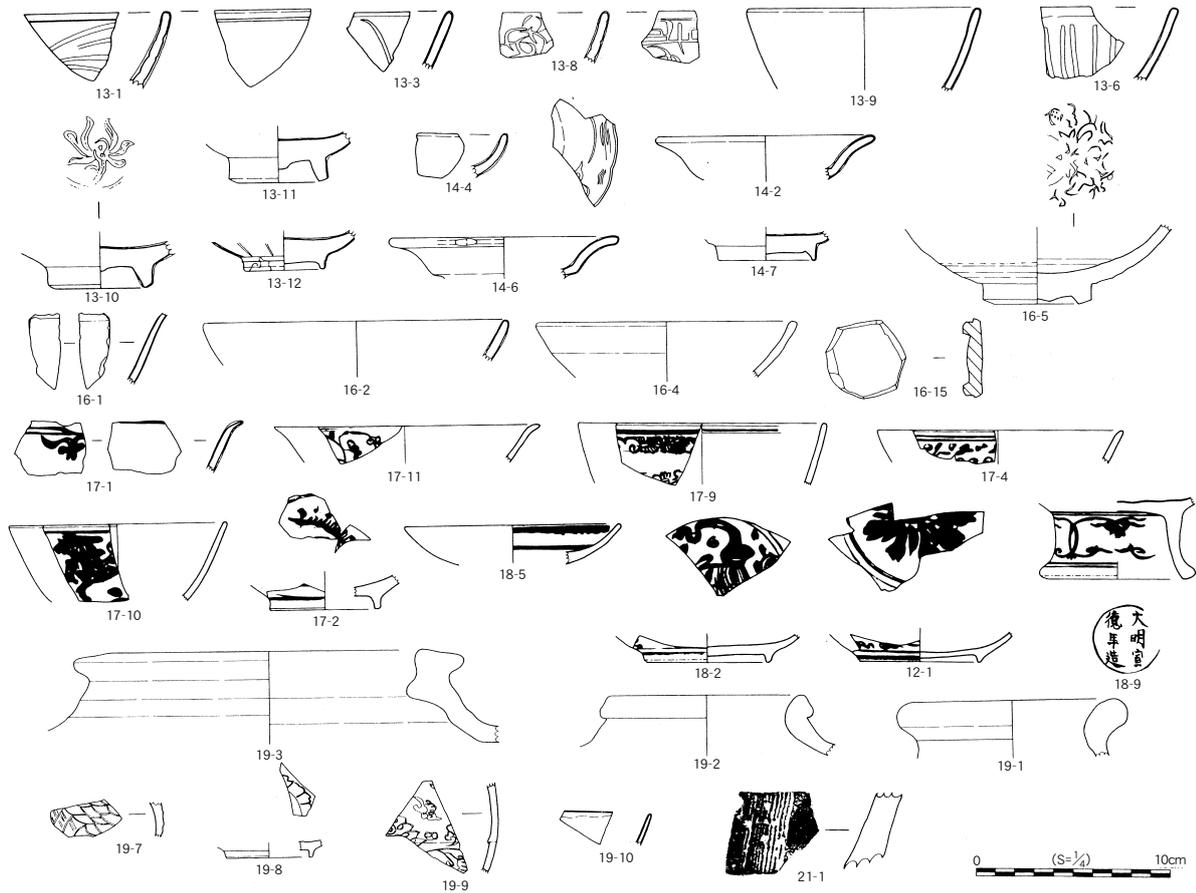
I 区



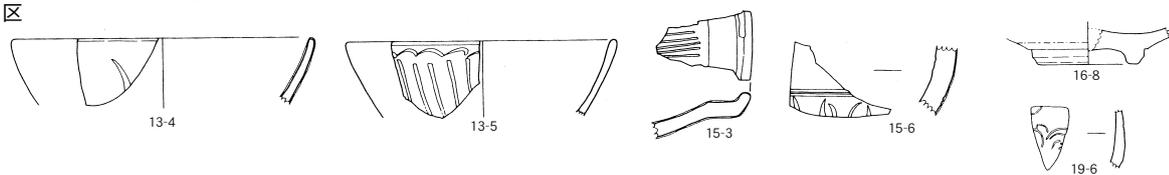
II 区



III 区



V 区



第7図 試掘調査出土遺物

(図の番号は今帰仁村教育委員会1986の報告書掲載番号に同じ)

## 第2節 基本層序

これまでの今帰仁城跡周辺遺跡（特に今帰仁ムラ跡）の層序は大きく分けて、最下部の自然堆積層・地山、下位の遺物を若干含んだ漸次的な自然堆積層、両者の上層に堆積する遺物包含層及び遺跡全体を覆う旧表土（及び人工的客土層）からなることが確認されている（第8図）。稀に包含層の下位に人為的な造成層とみられる土層及びその下層に分布する暗褐色層などがみられる場合もあるが、どの地点においても共通するという状況にはない。なお、自然堆積層は調査範囲全域に共通する層であるが、基盤岩である古期石灰岩に包含層や旧表土が被覆するか、被覆しないのかは後述する屋敷地を想定する際の大きな要素となっている。他方、調査地各所で遺物包含層とした黒褐色土層はグスク時代の遺物のみで構成され、プライマリーな堆積層と目される。各地区毎に分層したためそれぞれⅡ層やⅢ層の層名が付されている。このため報告される層名がそれぞれ地区毎に異なる場合があるので留意する必要がある。

また、これらの下位、地山の上位には層相の異なる褐色砂礫層等が堆積している。Ⅲa、V区の両地区で最も顕著に認められるこの層は、V区調査時には遺物包含層として扱い層相の異なる三枚に分層した。いわゆる整地層とも考えられたが、確認された層は自然堆積層として地山への移行層と理解される。今回の調査地区では今帰仁城跡の調査で確認されるような、造成層、整地層などは検出されなかった。しかし、西区屋敷地5の地域では更にこの推定自然堆積層と地山の間にもう一枚遺物包含層と考えられる層が堆積していることが確認されている。しかし史跡指定地内にあつては、遺構の保存が優先されるべきであることから、詳細は判然としない。周辺遺跡では基本的には大規模造成による整地は行われていなかったようで、志慶真門郭で見られるような土留め石積み及び造成は屋敷地3で見られたSR6に限られている。おそらくは、周辺地域の開発によって樹木が伐木され開墾が進み屋敷地として適地である緩斜面、平坦地が生成され、屋敷として選択されていったのではないかと考えられる。各調査地区での取り上げ時の注記と本報告書において統一した層名は第8図のとおりである。特に断りのない場合は、全て統一層名によって報告する。

I層：現代の工事等の造成層・旧表土層・耕作土層・ほか

I層Aは昭和になって実施された開発等による客土層。I層Bは大規模な開発造成が未着手で腐食土からなる表土層。I層Cは耕作土層で調査地のほぼ全域が耕地であったために形成された層である。耕耘が繰り返されるため地下深くに耕耘が及ぶ地域では下位の包含層や地山を掘削し攪乱坑となっている箇所も少なくなかった。時期的には近年まで耕耘が繰り返されていたと考えられガラスビンや近現代の陶磁器等を包蔵する。

Ⅱ層：【黒褐色土層】当該遺跡形成期のグスク時代の遺物包含層

Ⅱ層は遺物を包蔵する遺物包含層で出土遺物からグスク時代に限定することができる。暗褐色もしくは黒褐色の土層となる。

Ⅲ層：当該遺跡形成期初頭の旧表土層もしくは自然堆積層

Ⅲ層Aは地山への移行層で希にI区やⅡ区の一部地域で認められた。岩盤を埋めるように堆積すること、互層となる箇所が認められることなどから調査当初は造成層的な堆積層と考えていたがこれを確定的に判別できる事例が無かった。Ⅲ層Bは包含層から地山への移行層で粘性は無く1cm大の砂利を含む褐色土層で、ねじり鎌で表層を削る作業をするとジャリジャリと砂礫が刃にあたる音が現場に響く。包含層と近い土色ではあるがろうじてこれを判別することが

できる。

IV層：【黒褐色土層】 当該遺跡の主体時期以前のグスク時代の遺物包含層？

V層：【赤褐色土層・石灰岩】 地山

V層は地山で明るい赤褐色の土層である。また地山を更に掘り下げると一帯は古期石灰岩を基盤岩とする。古期石灰岩の岩盤は至る所で露頭している。例えば屋敷地3と4の境界であるIV区は南北に連なる尾根線となり北西には小高い丘を作っていて、ここでは散策路が設置され自然林を残すことから、グスク築城以前の自然林の様子を観察することができる。

地点毎によってそれぞれの堆積層の有無、層相の違いは見られるが総じて第8図のようにまとめられると考えられる。

遺跡名等		今帰仁ムラ跡西区										今帰仁ムラ跡東区	
調査次	3次	2次調査		10次調査	9次調査	8次調査	6次調査		7次調査	5次調査	1次調査	4次調査	12次調査
地区名	ハラクブ	I区	II区b	II区a	III区b	III区a	III区c	IV区		V区	外郭西区	1区	7区
屋敷地	集落外	不明	屋敷地1		屋敷地2	屋敷地3		露頭岩		屋敷地4	屋敷地5		
基本層序	上層 I層	I	I II	I II	I A II	I	I	I	I	I	I	I	I
	中層 II層	地山	地山	III	III	III	III	III	III	III	III	III	III
	下層 III層	地山	地山	地山	III	地山	地山	地山	III	III	III	III	III
	追加 IV層				地山				地山	IV			地山
	地山									地山			

第8図 今帰仁城跡周辺遺跡断面模式図

### 第3節 地区割

今帰仁ムラ跡はグスク時代に形成された集落跡で、今帰仁グスクの城下に展開する遺跡である。遺跡の立地する一帯は緩斜面といっても単純に緩やかな傾斜地となるわけではなく、起伏に富んだ凹凸のある岩盤といくつかの平坦面からなっている。このため調査開始時には地表面より観察できる一定の平坦面を発掘していく。これをⅠ区・Ⅱ区（ギリシャ数字）という調査区によって調査を開始する。他方、これらの地区は更に現況地積図を用いてa・b・c（アルファベット小文字）を付して細分を行う。一方これらの地区の群れを一つの地域あるいは遺跡として遺跡名もしくは東区・西区（和名俗称）を併用して標記する方法を採用している。以上の関係をまとめると、

「○○遺跡 > (東西南北) 区 > Ⅰ～Ⅱ区 > a～c」となる。

他方、調査の記録にあたっては、国土座標系に基づいたグリッド設定を用いる。即ち国土座標第15系（平成14年4月1日に施行された改正測量法に基づく）のX=76,800をM、76,790をN、以下南へ10m毎にO・P・Q…と英数字を振り、Z以降については、AA・AB・AC…として表記した。Y軸は、Y=42,500を原点10とし、10m毎に東へ11・12・13…として算数字を振り、その組み合わせによってM-10（X=76,800-Y=42,500）、AG-20（X=76,600-Y=42,600）のように呼称し、交点の杭はそれぞれ北西のグリッド区画を指示することとした。なお、調査区の設定や個々の遺物の取り上げについても国土座標系で取り上げ、各調査次毎にファイルを作成して整理している。

遺物の整理に関しては上述の調査前に確認していた地形的特徴から分けた地区と国土座標系に従った方形区画及び何次調査かを併記して、

例えば「4次 Ⅰ区 Ⅰ-26」のように注記した。

調査No.	地区	グリッド
-------	----	------

一方、調査が進むにつれて、遺構の平面分布と地表面で観察した地区割りに、くい違いが生じこれを整理する必要に迫られた。このため報告にあたっては上記の地区設定を考慮し併記するとともに、発掘調査の成果を踏まえた上で遺構の集中するところと、そうでないところ、岩盤の露頭するところとそうでないところを改めて一つのユニットとして捉え、特に遺構の分布が集中する箇所を中心としたユニットを「屋敷地」として推定し、屋敷地1・屋敷地2（算用数字）として屋敷地という概念を用いて整理することを試みている。またこれらの屋敷地以外に該当する岩盤露頭の著しい地区については、その他の地域としていくつかのまとまりあるグリッド毎に分割して紹介する。上述のような方法を採用することで、広い遺跡内において、どこに恒常的な生活が認められ、それ以外の地域でどのような活動が行われていたかを把握していく必要があると考えている。

以上まとめると、調査にあたっては地表面を観察し遺跡・地区範囲を決定。遺跡内における小区画としての地区を例えば東区Ⅰ区aのように標記し、調査を開始する。（なお、東西南北区は小字名程度を、ローマ数字及び英語小文字表記の地区は地積程度の地区設定となる。）調査にあたっては、全ての遺物・遺構を国土座標系で管理する。管理にあたっては事前に10m×10mのグリッドを設定。グリッド名は東西を算用数字、南北をアルファベットで記載し、今帰仁城跡の調査とも連続するものとする。また、発掘調査の進展に伴い遺構の分布の粗密などから建物跡が密集する地域を屋敷地として認定し、資料整理及び報告に関してはこちらを優先させている。



第9図 調査グリッド設定図 (S = 1/4,000)

## 第4節 出土遺物の整理と報告

今帰仁城跡周辺遺跡の出土遺物は、今帰仁城跡と比較検討を行うことができるように整理されることが望ましいと考える。これまで出土した遺物は多岐にわたるが、既に報告書を公刊したものの分類を基礎としながら、今回も報告を行いたい。具体的には、今帰仁城跡周辺遺跡の調査における追加分を含めて、これまでどおりの分類を基本とした『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』の陶磁器分類（金武・宮里ほか1991）及び、『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』の陶磁器分類（金武2005）に従った。特に本文では後者を、所見表には前者を併記するとともに、白磁は森田分類（森田1982）や青花（染付）は小野分類（小野1982）についても併記する形を採用している。集計の方法については、『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』の陶磁器集計方法（宮城2005）を用いた。即ち破片数の数量化を基本としながらも、遺物が小片で出土することが多いため、量的な把握については個体識別法を行い個体数を示している。出土遺物の集計は宮城の責による。

自然遺物の分析、自然遺物の分析については今帰仁ムラ跡西区Ⅲ区b（屋敷地2）と東区7区地区の分析を行うこととした。これ以外の小規模調査の資料や表採資料については重要と考えられる資料に限り対象とした。また、今回もなるべく土壌採集を行い、フローテーション法によって処理を行い炭化した植物遺体の分析を試みた。実施したのは今帰仁ムラ跡西区Ⅲ区b（屋敷地2）のSK300（土坑）・SK1035（土坑）・SK24（炉跡?）の3基の遺構覆土から採集した総計113.5リットルの土砂を対象とした。炭化種子の分析は高宮広土氏に分析を依頼した。なおSK1035（土坑）のHF（Heavy Float）から比較的多くの脊椎動物骨が得られた。そのほとんどは小さな魚の骨である。これについては前述の西区Ⅲ区b（屋敷地2）と東区7区の脊椎動物骨とともに樋泉岳二氏に分析をお願いした。貝類の分析は今回も継続して黒住耐二氏に依頼しているが、基礎的な分類や資料整理については赤嶺信哉氏の協力を得ている。

鉄製品については、仲里なぎさによって保存処理から分類、実測作業の一連の作業を担当していただいた。仲里には保存処理の経緯を含めたレポートを作成いただいたが、紙幅の都合前回に引き続き割愛せざるを得なかった。既に今帰仁城跡を含め数千のオーダーで鉄処理を行っており、その実績は大きい。保存処理方法の経過とあわせて、グスク時代に消費された鉄製品の概況について今後改めて報告を予定したい。この他にも、石質同定では、神谷厚昭氏に、出土人骨については土肥直美氏に依頼し所見をいただいた。

### 《参考文献》

- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2  
金武正紀・宮里末廣 1991年『今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第14集  
金武正紀 2005年「遺物の分類」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第20集  
宮城弘樹 2005年「集計」『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ』今帰仁村文化財調査報告書第20集  
森田 勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2